

小誌について

「學鐙」の歴史

「學鐙」の創刊は明治三〇年（一八九七）三月で、今年で創刊一二二年となる。この間、関東大震災（一九二三年九月一日）の後の九ヶ月、太平洋戦争末期（一九四四年一月）から昭和五年（一九五〇年二月）までの七年間、休刊を余儀なくされた。また、創刊から平成一五年（二〇〇三）まで月刊をつづけたが、ごく短い一時期に隔週で刊行したこともあった、平成一六年（二〇〇四）から季刊となり、平成二〇年（二〇〇八）から平成二三年（二〇一一）までは年二回の発行、平成二四年（二〇一二）から季刊に戻った。

「學鐙」の名称

「學鐙」は創刊当初「學まなびの燈あかり」と称し、明治三五年（一九〇二）に「學燈」と改題して、さらに明治三六年（一九〇三年）に「學鐙」と改めたが、その後長い間「學燈」と「學鐙」が混用され、「がくとう」「ガクトウ」という表記が使用されたこともある。さらに大正一三年（一九二四）七月号から昭和一七年（一九四二）一月号まで「GAKUTO」というローマ字を使っていた。「學鐙」が定着したのは昭和一七年二月号からである。

「學燈」を「學鐙」に代えた訳を『丸善百年史』（四九五ページ）で、「普通に燈はともしび、鐙はあぶみと読み、光明の燈火が、学間に乗る鞍に代ったのかと誰しも思う。近ごろこそ「學鐙」におちついたが、時ありて燈と鐙を混用しているので、惑いを招いたものの、魯庵（注、初代小誌編集長）のつもりでは鐙は燈の古字であり、正字であるから、つまり変更したという気もちは全く無かったのだ」と記し、また同じく『丸善百年史 資料編』（ivページ）で、「學鐙」が「學鐙」に変わったのは、（中略）鐙アクリルが登隆を意味するからで、本誌が登龍門を意味する自負によるものであるかも知れない。但し両題目が久しい間混用され（後略）」と記している。

「學鐙」の特徴

明治三五年（一九〇二）の社告に「当「學鐙」義は本年以後全く編集の組織を一変し専らビブリオグラフィを主とし及ばずながら読書界に貢献致す計画仕候」と記し、その年の一月号から四回にわたって七〇余名に対するアンケートによる「一九世紀に於ける欧米の大著述に就ての答案」（第一位『種の起源』、第二位『ファウスト』）を掲載し、つづいて明治三六年（一九〇三）の「臨時号」では上田敏、幸田露伴、森鷗外等による書誌、書史に関する特集を組むなど、地味ながら深い学識に基づく書誌によって本誌を特徴づけようとした。地味ながら深い学識に基づくという編集方針は、その後長い間受け継がれることとなった。（「學鐙」編集室）